

立教学院史資料センター編

『The Spirit of Missions 立教関係
記事集成〈抄訳付〉第二卷 (1890-1903)』

(立教学院 二〇一〇年)

西口 忠

米国聖公会内外伝道協会（以下、伝道協会）の機関紙『スピリット・オブ・ミッションズ』(*The Spirit of Missions*)に掲載された立教関係記事を記録した『立教学院一五〇年史資料集 The Spirit of Missions 立教関係記事集成〈抄訳付〉』(以下、『記事集成』)第二巻が二〇一〇年三月に刊行されました。第二巻には一八九〇年から一九〇三年までの記事が収録されています。なお、一八五九年から一八八九年までを収録した『記事集成』第一巻については、大江真道氏が『立教学院史研究』第七号(二〇一〇年三月)でその特徴や内容等を紹介されています。

『記事集成』第二巻の「記事No.66」(一八九五年二月号)は、伝道協会日本ミッションが一九〇四年十二月から日本国内で『チャーチ・イン・ジャパン』(*The Church in Japan*)を刊行したことを報じています。当

初は二カ月に一回の発行でしたが、後に月刊誌となりました。しかし、『記事No.126』(一九〇一年九月号)によると一九〇〇年(六年間)に打ち切られたということですが、『記事No.66』の注記として一九一七年から一九二六年まで『チャーチ・イン・ジャパン』の継続誌として*New Series*が刊行されていたことも紹介されています。この二種類の雑誌について筆者は今まで知らなかったのので、是非閲覧したいと思っています。

筆者が勤務する桃山学院は英国聖公会宣教協会(*The Church Missionary Society* 以下、CMS)により設立されました。CMSも同じような機関紙を刊行しています。月刊誌としては『CMインテリジェンサー・アンド・レコード』(*The Church Missionary Intelligencer and Record*)があります。日本からまた世界各地から多くの宣教師が英国の本部へ手紙を送りました。その膨大な情報が掲載されています。

『CMインテリジェンサー・アンド・レコード』の発行について、ユージン・ストックは著書*The History of the C.M.S.*第二巻の中で概ね次のように記しています。CMSの委員会は教養ある男性、女性に利用されることを目的に月刊誌の発行を計画しました。宣教師からの重要な手紙に記された、それぞれの伝道地に表れる地理、民俗、宗教などの話題を掲載するということです。数カ

月にわたる検討の結果、既に一八三〇年から発行されていた月刊誌 *The Church Missionary Record* に代えて刊行することになりました。一八四九年五月に刊行された時の名前は *The Church Missionary Intelligencer* です。

この月刊誌は一九〇五年まで刊行されました。一九〇六年には『チャーチ・ミッションナリー・レビュー』(*The Church Missionary Review*) に改題され、一九二一年まで刊行されました。

『CMインテリジェンサー・アンド・レコード』の日本関係記事には桃山学院、プール学院、そしてCMSの各伝道地のことが掲載されています。これまで桃山学院関係の記録については、『桃山学院百年史』や『桃山学院年史紀要』にその一部を翻訳し、掲載してきました。

一方、CMSジャパン・ミッションが日本国内で発行したものとしては『CMSジャパン・クォーターリー』(*C. M. S. Japan Quarterly*) があります。雑誌名の通り年四回の発行であり、一九〇五年から一九四一年まで刊行されていたことが確認できます。桃山学院史料室には五冊の現物と、マイクロフィルムから複製製本したものがあり、閲覧が可能です。また掲載された桃山学院関係の記事を順次翻訳し『桃山学院年史紀要』第三十号(二〇一一年三月予定)から掲載していきます。なお現物五冊内の桃山学院関係記事については第二十四号

(二〇〇五年三月)に掲載しました。

『記事集成』第二巻は一八九〇年から一九〇三年の記録です。この期間は立教学院にとって、最も大きな転換期であり、発展の時期でもあったと思います。筆者はあらためて『立教学院百年史』、『立教学院百二十五年史図録』を読みなおしました。もちろん『記事集成』第一巻も読みました。『記事集成』の記事は宣教師たちが本国に送った報告です。そこには立教学院の状況と伝道協会日本ミッションの働きが生々しいまでに記録されています。『立教学院百年史』では記述されなかった多くの内容があり、あらためて学校経営やミッションのために働かれた宣教師や日本人たちの努力には敬意を表さざるをえません。

『記事集成』第二巻から筆者が特に関心をもった出来事を何点か紹介したいと思います。

一八九〇年、泰西学館(大阪)の教頭であった左乙女豊秋を主監として迎えます。この時のことを「記事No.14」(一八九二年二月号)は「新体制のもと」と記述し、「記事No.11」(一八九〇年十一月号)は「数年のうちに、(中略)自給状態になりうる」としています。桃山学院においても一八九三年に本田増次郎を副校長に招聘しました。何れも宣教師中心による学校経営の困難さからの採用であったと思われる。[記事No.19](一八

九一年九月号)には三一神学校と立教学校のあり方に日本人がかなり反発していることを記しています。その結果二人の日本人を採用することになります。

次は、築地の園のシンボルと仰がれた立教中学校の六角塔に関する記事についてです。立教学校の建物が調査の結果、耐震面で問題があることが分かり、「記事No.3」(一八九三年八月号)に「立教学校非難される、三万ドルを要す」という電報が東京から届いたことが載ります。新校舎建設の予算要求をしますが、翌年六月に地震が起り建物の一部は壊れ、一名の日本人教師が亡くなつてしまいました。その被害状況については「記事No.5」(一八九四年七月号)から「記事No.57」(同年九月号)に詳しく報じられています。

そして「記事No.60」(同年十月号)には新しい建物の建設計画がガーディナー氏により進められていることが掲載されています。その後、建物が再建されたことについて、「記事No.90」と「口絵No.4」(一八九八年三月号)として掲載されています。口絵には既に六角塔の校舎が写っています。しかし「記事No.96」(同年六月号)によれば暗誦ホールは未完成で、「一部はいまだに屋根がなく」という状態を伝えていきます。「記事No.105」(一八九九年七月号)になると「新しい諸建築も急速に完成に近づいて」きたことを知らせています。『立教学

院百年史』では一八九九年七月に全計画が竣工したと記されていますが、完全竣工までに長い道のりがあったことが分かります。

次は「私立学校令」の施行と「訓令第十二号」を巡るキリスト教学校の動きについてです。宣教師は訓令第十二号を英語に翻訳し本部に送付しました。その日本語訳である「記事No.109」(一八九九年十二月号)によると「たとえ正規の学課外であっても、宗教教育は施されなくてはならず、また宗教上の儀式は挙行されてはならない」というものでした。八月九日にアーサー・ロイド総理、元田作之進校長、チャールズ・H・エヴァンスが東京府庁を訪問した記録については『立教学院百年史』に日本語の原文が掲載されているので、宣教師が本国へ送付した内容と比較することは興味あることでもあります。さらに青山学院、同志社ほか六校の代表者が集まって声明文を送りますが、立教学校の立場が他のキリスト教学校と違うことが明確になります。すなわち、中学校では宗教教育を施していないということです。このことは『立教学院百年史』にも「スピリット・オブ・ミッションス」の訳で引用されています。この「記事No.109」の全文と「記事No.110」(同年十二月号)、「記事No.114」(一九〇〇年二月号)から立教学校が認可校申請に至る経緯が非常によく理解できます。

最後は、立教学院そのものの記事ではないですが、日本聖公会の働きとして興味を持った記事のことです。東京帝国大学の学生に対して阪井徳太郎が一九〇二年に寄宿舎を設け「同志会」を組織しました。「記事No.135」(同年十月号)、「記事No.143」(一九〇三年五月号)に詳しく報じられています。この同志会は一九〇三年から一九四二年まで日本聖公会の一組織として『聖公会略暦』や『聖公会要覧』にも記載され、元田作之進著『日本聖公会史』(一九一〇年)にも記されています。しかし『日本キリスト教歴史大事典』には短い記述があるものの、聖公会との関係は触れていません。『同志会七十年史』(一九七三年)には同志会と阪井徳太郎、日本聖公会との深い関係が詳しく記述されています。

今後もし引き続き刊行される『記事集成』に大いに期待しています。